

EAJRS ブカレスト大会参加報告

せき ひでゆき
関 秀行

(湘南藤沢メディアセンター事務長)

1 はじめに

EAJRSはEuropean Association of Japanese Resource Specialistsの略称で、日本語名称は「日本資料専門家欧州協会」である。“欧州における日本に関する情報や資料の発展および普及の促進を目的に作られた国際的な協会組織”¹⁾であり、日本資料に関心のある者であれば誰でも加盟できる。加盟者の詳細は明らかではないが、協会のボードメンバーの所属から、日本研究および日本研究図書館の関係者を中心に運営されていることがわかる。上記の目的達成のために活動を行うEAJRSの主要な事業の一つが年次大会 (annual conference) の開催である。

EAJRS創設の翌年の1990年にハンガリーのブダペストで開催された最初の大会以降、EAJRSの年次大会は欧州各地で毎年開催されている。筆者は2016年9月14日から17日の4日間ルーマニアのブカレストにおいて開催された第27回大会に参加し、慶應義塾大学における図書館職員の海外研修に関する事例報告を行った。以下、参加の経緯、ブカレスト大会の概要、発表の内容について報告する。

2 今回参加した経緯

(1) 英国研修とEAJRS年次大会の関係

慶應義塾大学メディアセンター(以下「本学」とする)は、英国ノリッジにあるセインズベリー日本藝術研究所への図書館職員の派遣を実施している。これは同研究所を受入れの拠点に英国内のJapan Library Groupの各図書館を主な訪問先として実施する、本学の図書館職員の海外研修として位置づけているものである。2012年の開始以来毎年1名を継続して派遣しており、本号刊行時点で研修者は6名に上る。

英国研修は毎年9月に渡欧し3~4ヶ月の期間滞在する日程で実施している。これはEAJRSの年次大会が毎年9月の中旬に開催されることと関係している。英国研修の初年度(2012年度)と2年目(2013年度)は年次大会終了後に渡英したが、3年目(2014年度)と4年目(2015年度)の研修ではそ

れぞれベルギーのルーヴェン大会(2014年度)とオランダのライデン大会(2015年度)に参加し、そのまま英国研修につなげる日程を組んだ。年次大会には英国研修でお世話になる各図書館の担当者が毎年参加しており、研修の開始時期が大会終了後になるように設定しているのである。年次大会での見聞の意義に加えて、研修で訪問する図書館の担当者と交流できることで、英国研修がより実りあるものになると考えてのことである。

(2) ブカレスト大会参加の経緯

EAJRS年次大会での本学の海外研修をテーマにした事例報告については、英国研修でお世話になっている図書館の方々からも勧められていた。発表参加の機会をうかがってはいたが、海外に出向いての発表という一大事にはなかなか決心がつかなかった。

ブカレスト大会の「International Cooperation Between Japanese Studies Libraries(日本資料図書館の国際協力)」というテーマは、本学の海外研修に関する発表の機会として適したものであった。それに加えて、当年度の英国研修の開始時期がずれ込み研修者のブカレスト大会参加が予定されなかったことなど、今回は様々な点で条件が整っていると判断し、発表者としての参加を決めた。

3 ブカレスト大会の概要

ブカレスト大会²⁾の会場となったブカレスト大学中央図書館は、旧共産党本部の建物に隣接する、街の中心的な場所に建てられた荘厳な建物である。

ブカレスト大学には1975年に設立された日本語学科があり、日本語、日本文化を教えている。この日本語学科の教員、学生が大会のホストとなり、EAJRSの事務局とともに大会運営を支えていた。学生がそれとわかる法被を常に着て、空港での出迎えから会場での発表補助まで終始サポートしてくれた。

大会は4日間の構成である³⁾。基調講演に位置付けられる発表は45分間、それ以外の発表は20分ないしは30分間で生まれ、発表数は34に上った。34件の



図1 会場となったブカレスト大学図書館の建物

内、「研究」の視点によるものが23、「図書館」の視点によるものが11であった。また、発表は英語と日本語どちらでも可であるが、今回は、英語による発表が20、日本語での発表が14であった。筆者は、参加者全員が日本語を話せる訳ではないと聞いていたので、事前の準備をしっかりとやれば何とかなるだろうという楽観的な気持ちから、英語での発表を選択した。その後相応の苦勞をすることになったが、実際に参加してみると、日本語が堪能な海外の方々も多かったものの、やはり英語でないと通じない参加者も少なくなかったため、本学の活動をより多くの人に理解してもらうという点で、英語で発表したのは適切だったと思っている。

発表以外のセッションとして、最終日にすべての発表が終わった後に行われた総会（General assembly）がある。日本では図書館関係団体の大会などで研修会等のイベントと総会を併せて行う場合、まず総会を実施してその後に講演会や研修会などがあるという構成が一般的なので、総会が最後である点は新鮮であった。

また、3日目の午前中はResource providers workshopという参加プロバイダー（研究機関、ベンダー等）による商品や提供コンテンツの説明のための時間に充てられていた。建物内の決められたスペースにブースが設けられ、参加者が各プロバイダーから説明を受ける形のワークショップである。図書館関係の参加者と各プロバイダーが情報交換しながら交流を深める大事な機会になっている様子がうかがえた。このほか、オプションとして各日のセッション終了後に夕食会や文化施設見学なども企画されていて、参加者間での友好を深めることも大会の重要な狙いの一つになっていると感じた。

4 発表の内容

本学の海外研修に関する事例報告として「International exchange activities at Keio University Media Center（慶應義塾大学メディアセンターにおける国際交流活動）」という演題での発表を行った。



図2 筆者発表時の様子

25分間の発表と5分間の質疑応答という時間配分であったが、英語でしゃべるスピードを考え、発表の内容は「慶應義塾大学の紹介」「メディアセンターの国際化の状況」「海外研修の実施状況」の3つに絞った。

発表の中心は「海外研修の実施状況」である。本学の海外研修の全体的な歴史も含めて、その目的、期待する効果、実績などを紹介した。より明確なイメージをつかんでもらうために、実績の部分に関しては、近年の派遣の事例として英国研修の事例2件、カナダのトロント大学での研修の事例1件について、研修者の顔写真も示しながら、各々の研修者が訪問先で何を学び、どのような貢献を果たしたかを具体的に紹介した⁴⁾。

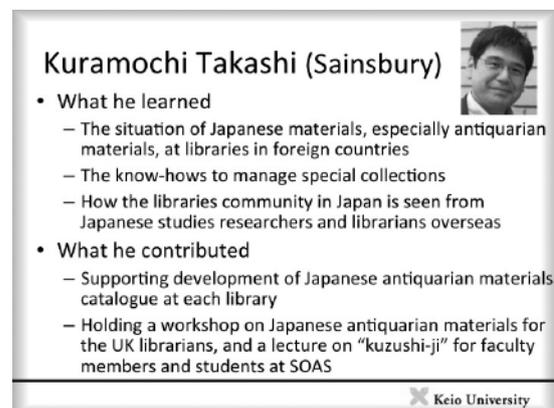


図3 海外研修の事例紹介のスライドの例

今回、海外研修の事例紹介に当たって「International exchange」という表現を用いたが、実際にexchangeの意味するところの人材の「交換」まで達成できているのはトロント大学との間のみであり⁵⁾、他の図書館とは本学からの一方的な派遣にとどまっている。今回の発表では、この点について今後の課題として触れつつ、これまで本学からの研修者を受け入れていただいた図書館の関係者に向けた謝辞を以て発表を終えた。

質疑応答では、トロント大学における研修者の活動の詳細や派遣している間の人員補充はあるのかといった、発表の中で十分に説明できなかった点について質問を受けた。そして最後に、英国研修の訪問先の一つであるオックスフォード大学ボドリアン日本図書館のイズミ・タイトラー氏から「慶應からの図書館員の受け入れは、自分たち（海外の日本研究図書館）の現況についての理解者を増やしていくことにもつながっている」という主旨のコメントがあった。筆者の発表内容に価値ある補足をしていただき、ありがたく思っている。

英国研修での訪問先は、英国のJapan Library Groupの各図書館を中心に、フランス、スウェーデンなど英国以外のEAJRSメンバーの図書館にも広がっている。欧州の日本関係の図書館員、研究者が集う場であるEAJRS年次大会での今回の事例報告が、本学の海外研修の今後の発展につながる「種まき」になっていれば幸いである。

5 おわりに

EAJRS年次大会は、海外で開催される他の図書館関係のイベントと比べると規模は小さい。「日本研究」をキーワードに日頃からつながりのある人同士の集まりという性格からアットホームな会合という印象を持った。実際にこの大会への毎年の参加を楽しみにしているという声も多く聞いた。発表に関しても、前述の通り短時間の発表を数多く組んでおり、日本からも毎年国立情報学研究所や国立国会図書館を始めとして、多くの研究者、図書館関係者、プロバイダーが発表参加している。発表者としてエントリーするに当たってのハードルは決して高くはない。本学からも適度な頻度で発表参加をし、参加者や関係機関との交流を深める機会にできないかと考えている。

注

- 1) <http://www.eajrs.net/european-association-japanese-resource-specialists> (accessed 2017-08-24)
- 2) ブカレスト大会の詳細は以下を参照されたい。
<http://www.eajrs.net/conferences/2016-bucharest> (accessed 2017-08-24)
- 3) EAJRSのサイトに記録が残る1994年のボン大会が既に4日間であった。
- 4) 発表でのスライドは以下にて公開されている。
http://www.eajrs.net/files/happyo/seki_hideyuki_16.pdf (accessed 2017-08-24)
- 5) トロント大学からはこれまで4名の派遣を受け入れている。以下は本学に滞在したトロント大学からの研修者の報告記事である。
リン・杏掛. 研修と交流：慶應義塾大学メディアセンターでの交換研修. Medianet. 2005, no.12, p.78-79.
<http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/01200780.pdf>, (参照 2017-08-25)
Rocha, Fabiano Takashi. Librarian Exchange Program Report : 23 Feb 2009 to 13 Mar 2009. Medianet. 2009, no.16, p.81-83.
<http://www.lib.keio.ac.jp/publication/medianet/article/pdf/01600810.pdf>, (参照 2017-08-25)